

クリーブランド美術館所蔵の 永康元年画文帯四獣鏡について

原田 三壽

はじめに

2000年、アメリカのオハイオ州にあるクリーブランド美術館から、92面の中国鏡を紹介する図録が刊行された。^(注1) その中には2面の紀年鏡も含まれており、1面は元の至元4年(1338)^(注2) 鏡で、もう1面は「四乳八獣鏡」と名づけられた永康元年鏡である。

永康元年は、後漢、西晋、後燕、西秦の4回ある。それらを西暦でいえば、後漢は167年、西晋は300年、後燕は396年、西秦は412年だが、報告では西晋(265~316)の永康元年とする。いずれに該当したとしても、この紀年鏡の資料的価値は大きいのだが、どの時代のものかによって紀年鏡の持つ意味はかなり違ってくる。

本稿は資料の概要を報告した後、各要素を比較して、この鏡は報告どおり西晋鏡なのか、その他の時代の可能性はないのかを検討しようとするものである。

1. 資料の概要

永康元年「四乳八獣鏡」(第1図)は、直径19.6cm、重さ1,495gを測る。鈕座は有節重弧文で、内区には乳が4つある。乳の間に獣像が1つずつ配置され、獣の背中には羽人が乗っている。4獣のうち2獣は後ろを振り返り、乳を挟んで2獣が向かい合う形となる。図録ではいずれの獣像についても名称をあげていない。各乳の周囲には蟠踞する4獣も表現される。これら乳の間の4獣と乳の周囲の4獣から、報告者は「四乳八獣鏡」と呼称したと考えられる。

主文の外側には銘帯があり、右回りに「永康元年、正月午日、由東黄日、早作明竟、大吉大宮、延長壽命、上有王父西王母・」(銘文上の・は左字)と記される。銘文中の「由」は「幽」、「早」は「造」の音通、「宮」は「富」を略して書いたものである。あくまで写真だけの判断であるが、全体にしめる銘帯の幅が、外区の画文帯や菱雲文帯と比べて狭いように見受けられる。「凍」の偏が省略され「東」だけが記されたり、「明」の隣の「月」が縦の線だけになっていることなどは幅の狭さと関係あるのかも知れない。

外区は二重の文様帯からなり、内側は画文帯、外側は菱雲文帯で構成される。その間に



第1図 永康元年画文帯四獣鏡

は小さく間隔のあいた連弧文がめぐり、内区側の斜面には細かい鋸歯文が施される。画文帯は、中心となる雲車の輿の前に主人が座り、輿の後ろには2人の侍者が丸いものを捧げ持ち、羽人とおぼしき2人の御者が6龍のひく雲車を御している。6龍の前には背中に羽人を乗せた3匹の虎、その前には2羽の鶴、その前には4匹の亀、その前には日月を奉じる神がみえる。精緻な画文帯の図像表現と比べると、やや稚拙な印象を受ける。菱雲文帯は菱形の中に渦文が4つ入るもので、内区側から見て右側に列点文が施される。菱形が半截され三角となった部分にも渦文が1つ入る。幅は、画文帯よりもこちらの方が幾分広い。

2. 後漢鏡との比較

時期を検討するに当たっては、年代の古い順に調べていくこととし、まずはじめに、後漢鏡の内区主文、銘文、外区と比較してみよう。以下、クリーブランド美術館所蔵の永康元年鏡のことをクリーブランド蔵鏡と略記する。

1) 内区主文

この鏡は内区に乳が4つあり、その間に獣像が1つずつ配置された四獣鏡である。四獣

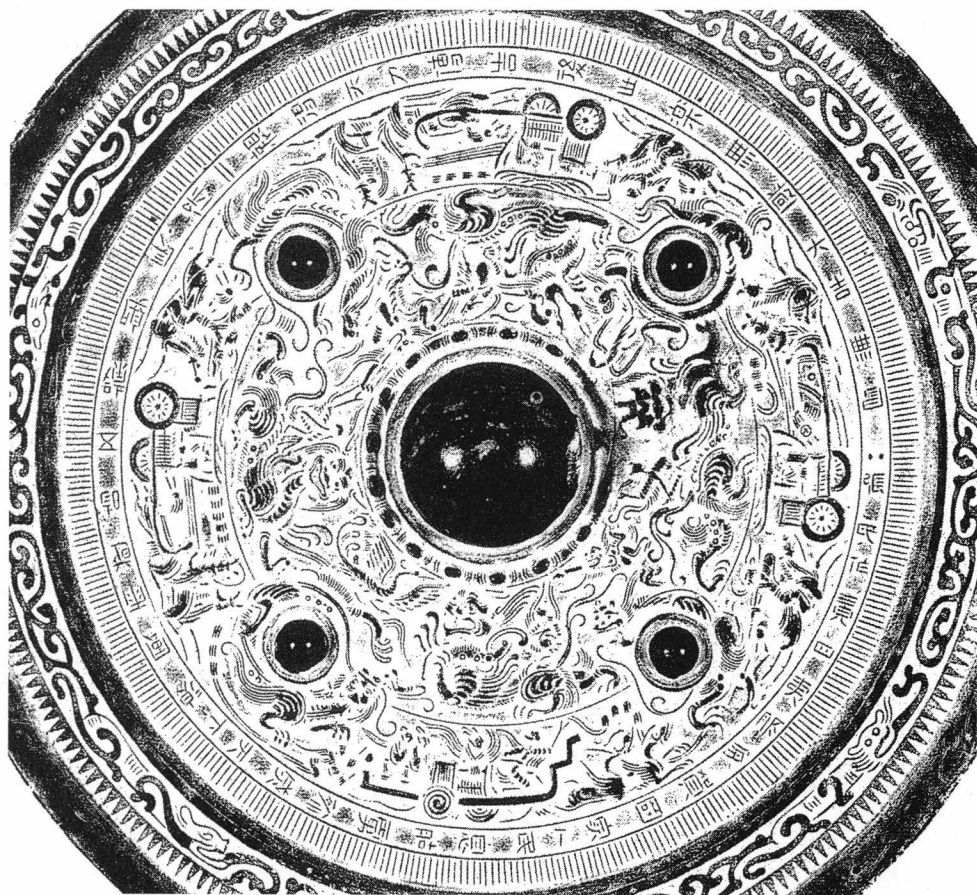
鏡の形式は、方銘四獣鏡、画文帯四獣鏡、銘帯四獣鏡、斜縁四獣鏡など数種に分類される。^(注3)

主文に関連して、そもそもこの鏡の名称を何とするかが問題となる。それは、我が国の銅鏡の分類には「四乳八獣鏡」という鏡式はないからである。そのため主文が四獣で、外区に画文帯を持つことからすると、名称は画文帯四獣鏡とするのが適当と思われる。そこでこのような鏡の類例を調べるため、四獣鏡の中でも画文帯及び銘帯を持つことが共通する画文帯四獣鏡と銘帯四獣鏡とを比較してみたい。

画文帯四獣鏡には、京都府城陽市久津川箱塚古墳出土鏡、栃木県那珂川町駒形大塚古墳出土鏡、浙江省紹興出土鏡などがある。これらはいずれも、乳のかわりに花蕾形の文様により4獣が区画される。久津川箱塚古墳出土鏡は、直径12.7cm、銘文は1方格2文字で「吾作明竟、□□三商、□□萬疆、統徳公侯、其師命長」とある。駒形大塚古墳出土鏡は、直径13.3cmを測る。画文帯の図像は粗雑で、半円方形帯の半円形内に蓮華文を表し、4獣のまわりに躍動的な小禽や羽仙も表現される。銘文は1方格1文字で「吾作明竟、大吉宜子、位至公侯」とある。この鏡の製作時期については3世紀以降とする考え方がある。^(注4) 浙江省紹興出土鏡は巖窟藏鏡に紹介されたもので、直径11.8cm、銘文は1方格1文字で「吾鏡清明寿益其師命長」とある。^(注5)

これら3面は、大きさが11～13cmと小さく、内区にはいずれも半円方形帯があり、銘文は全てこの方形内に施されたものである。外区は画文帯と菱雲文帯(紹興出土鏡は渦文帯)という構成で、クリーブランド藏鏡と比較すると、大きさ、銘帯の有無が大きな違いであり、銘文の内容も特に類似点はない。

銘帯四獣鏡には、福岡県久留米市祇園山古墳1号甕棺墓出土鏡や五島美術館藏鏡(藏品番号85)などがある。祇園山古墳1号甕棺墓出土鏡は、半分ほどしか残らない破鏡で直径10.4cm、主文の細部はよくわからない。これにも半円方形帯があり、外区は銘帯と菱雲文帯になっている。方形内は1文字ずつで「善同出丹」の部分が読め、銘帯には「吾作明□、幽凍三商、彫刻無祉、配像萬(不明)番昌兮」とある。この銘文は、上野祥史氏の分類によるA3に当たるが、氏はこの銘文の流行年代は160年頃から220年頃と考えている。^(注6) 五島美術館藏鏡は直径13.5cmを測り、内区は先の久津川箱塚古墳出土画文帯四獣鏡とほとんど同じ花蕾形の文様により四獣が区切られている。この鏡にも半円方形帯があり、外区は銘帯、菱雲文帯である。方格は1文字ずつで「吾作明竟、幽凍三商、配像萬疆」とあり、銘帯には「吾作明竟、幽凍三商、配像萬疆、統序道、衆奉賢良、聖徳光明、□□安楽、子孫番昌、士至公卿、其師命長(以下略)」とある。この銘文は、樋口隆康氏の分類によるS式、上野祥史氏の分類ではA2に当たるものである。



第2図 画像鏡（上海58）の内区

クリーブランド蔵鏡は、主文の外側に幅の狭い銘帯があり、外区は二重の文様帯で画文帯と菱雲文帯という構成であった。この鏡と比較するためにあげた画文帯四獣鏡と銘帯四獣鏡は、両方を比較すると外区が画文帯か銘帯かの違いであって、どちらにも内区には半円方形帯があった。例えば久津川箱塚古墳出土の画文帯四獣鏡が、クリーブランド蔵鏡のような構成をとろうとするなら、半円方形帯の部分が銘帯とならなければならないが、そのような資料は確認できなかった。したがって、クリーブランド蔵鏡は四獣鏡の中でも特異な例のように思われる。

次に、乳の周囲に蟠踞する獣像について考えてみよう。こうした獣像は画文帯同向式神獸鏡によく見られるものである。この鏡式以外で、同じように蟠踞する獣像を持ち、クリーブランド蔵鏡の内区主文に類似したものを探したところ、第2図にあげた上海博物館所蔵の画像鏡(図版番号58：以下上海58と略記)^(注7)があった。

この鏡は、内区が二段になった文様帯の外側にある雲車が写実的なことから、画文帯に施される雲車の原初的な形態を示すものとして小山田宏一氏が注目した資料である。氏は、

雲車前後部の形態が時期によって変化することから、それにより画文帯同向式神獣鏡が編年できると考えた。^(注8)さらに、福永伸哉氏は同様な変化をもとに、雲車の形態を階段A型、階段B、天秤A、天秤Bに分類した。^(注9)

上海58の主文は内外2つに分かれているが、報告では内側の四獣は青龍、白虎、天禄、辟邪という。報告のとおり、四獣が青龍、白虎、天禄、辟邪に比定できるかどうかについては、今ここでは問題としない。重要なことは、上海58の四獣とクリーブランド蔵鏡の四獣とが、対応するいずれの獣像も類似しており、四乳の回りに盤踞する獣像の形態もまたよく似ていることである。ただ、若干の違いは羽人の有無で、上海58の四獣の背中には羽人が乗るが、クリーブランド蔵鏡には羽人は表現されていない。

前章でクリーブランド蔵鏡の概要を述べた際、四獣の名称についてはふれなかった。上海58の四獣が、報告どおり青龍、白虎、天禄、辟邪だとすると、形状の類似からクリーブランド蔵鏡の四獣も同じ獣名とすることができる。内区主文のこうした類似から、鏡式は異なるもののこの2面には密接な関連があったことが推定できる。したがって、上海58の製作年代を考えることは、クリーブランド蔵鏡の製作年代を推定する上でも有効である。

2) 銘文

次にクリーブランド蔵鏡の銘文と4面ある永康元年鏡の銘文とを比較してみよう。

今回、これら5面の銘文を検討するに当たっては、拙稿1997と同様、中平4年鏡も加えることとし、①から⑤は永康元年鏡、⑥を中平4年鏡とする。①は銘帯環状乳神獣鏡(直径12.3cm、久保惣記念美術館蔵)、②は画文帯環状乳神獣鏡(直径16.2cm、上海博物館蔵)、③は獣首鏡(直径13.0cm、書道博物館蔵)、④は獣首鏡(直径14.7cm、鄂州市博物館蔵)、⑤をクリーブランド蔵鏡とする。⑥は中平4年画文帯環状乳神獣鏡(直径22.2cm、上海博物館蔵)である。

6面の銘文が比較しやすいように下記のとおり並べてみた。これにより文字の省略と追加、位置の転換、類似した語句などが明らかとなった。以下いくつか気のついた点をあげておく。

- | | | | | | |
|-----------------|------|---------|------|------|---------|
| ① 永康元年 正月丙午日 | 幽凍三商 | 早作尚方明竟 | 買者大富 | 且昌 | 長宜子孫 |
| ② 永康元年 正月 午日 | 幽凍黃白 | 早作 | 明竟 | 買者大富 | |
| ③ 永康元年 正月丙午日 | | 作尚方明竟 | 買者 | | 長宜子孫 買者 |
| ④ 永康元年 六月 八 日庚申 | 天下大赦 | 吾造作尚方明竟 | 合凍黃白 | 周兮 | |
| ⑤ 永康元年 正月 午日 | 由東黃日 | 早作 | 明竟 | 大吉大宮 | |
| ⑥ 中平四年 五月 午日 | 幽凍白同 | 早作 | 明竟 | 買者大富 | 長宜子孫 |

- ① 延寿命長 上如東王父西王母 君宜高官 立至公侯 大吉利
 ② 延寿命長 上如 王父西王母兮 君宜高位 立至公侯 長生大吉 太師命長
 ③ 延寿万年 上有東王父西王母 生如山石 大吉
 ⑤ 延長寿命 上如 王父西王母・
 ⑥ 延年命長 上如 王父西王母兮 大樂未央 長生大吉 天王日月 太師命長

⑤クリーブランド蔵鏡の銘文は、「永康元年」の次に「正月午日」と続く。これは、①、③の「正月丙午日」から「丙」が省略されたものである。これと同じように省略のあるものとして、末尾の語句「上如王父西王母」をあげることができる。これは、①の「上如東王父西王母」から、「東」が省略されたものである。1方格4文字で展開する銘文ならば4字句に整える必要があるため省略は避けられないことであるが、クリーブランド蔵鏡の銘文は、銘帯に施された銘文でそうした制約がないにもかかわらず、4字ごとに区切る銘文となっている。

「正月午日」に続く「由東黄日」だが、「由」は「幽」の音通であるから、「幽凍黄白」として考えれば②画文帯環状乳神獸鏡と同じになる。ところで、この「黄白」について、駒井和愛氏は黄を銅、白を錫と考えたが、笠野毅氏は、黄は金、白は銀を表しているという。^(注16)④獸首鏡は「合凍黄白」で、語句としては「合」と「幽」の1字違いだが、これも用いる金属は同じ「黄白」である。この「黄白」について、後漢の紀年鏡の中で類例を調べてみると、永嘉元年夔鳳鏡の「幽凍白黄」、熹平3年獸首鏡の「合凍白黄」、中平4年獸首鏡の「合凍□黄」などがあることから、永康元年鏡のような「黄白」よりも「白黄」と表記する方が多かったことがわかる。なお、⑥中平4年鏡は「白同」と記す。「白同」は「白銅」であろう。

「由凍黄白」の次には「早作明竟」と続くが、この語句は本来「造作明竟」で、「造」の音通で「早」と表記されたものである。永康元年鏡では環状乳神獸鏡の2面が「早」と記されており、⑥中平4年鏡も「早」となっている。他の後漢中後期の紀年鏡を調べてもこれら以外に「造」を「早」と表記するものはない。したがって、「早」の音通もこれら永康元年鏡の関連の深さを示すものといえよう。

クリーブランド蔵鏡の銘文は「上如王父西王母」で終る。これは先にもふれたように①の「上如東王父西王母」から「東」が抜けたものである。後漢の紀年鏡で、「東王父西王母」が出てくるものの類例を調べると、③獸首鏡や建寧元年獸首鏡(南陽市博物館蔵)では、「上有東王父西王母」と「上」の次には「有」を使用している。これを訓読すれば「上に

東王父西王母あり」となる。これ以外の例では、元興元年環状乳神獣鏡(五島美術館蔵)の「寿如東王父西王母」^(注18)、延熹9年獣首鏡(磁器館蔵)の「寿如東王父」^(注19)がある。寿は「よわい、いのちながい」などとよむので、この場合は、「寿は東王父西王母の如し」となる。ところが、ここで問題にしている⑤クリーブランド蔵鏡と①、②、⑥の環状乳神獣鏡の銘文は、それらのいずれでもない「上如(東)王父西王母」という語句になっている。これについては、「延寿命長、寿如東王父西王母」となると「寿」が重複するため、それを避け「上」を用いたとも考えられる。ただ後漢の紀年鏡の中では、永康元年鏡以外にこのような事例はないことと、「上如東王父西王母」では訓読が苦しいように思われるので、ここの「上如」は「上有」と「寿如」とが混じり合った可能性を指摘しておきたい。

ここで、銘文の比較から判明したことをまとめておこう。

クリーブランド蔵鏡は、銘帯に施された銘文にもかかわらず文字を一部省略して4字句でまとまりのある文章になっている。末尾の「西王母」は3字のため珠点を入れて4字とする。「由凍黄白」は「幽」が「由」となっているものの、「幽凍黄白、早作明竟」の語句は②画文帯環状乳神獣鏡と同じである。「早作明竟」は、①、②の永康元年鏡及び⑥中平4年鏡に共通しており、クリーブランド蔵鏡とこれら環状乳神獣鏡とのつながりを感じさせる。「上如王父西王母」については、②と⑥の画文帯環状乳神獣鏡と同じであり、①銘帯環状乳神獣鏡は「王父」のところが「東王父」と本来の省略しない形であるが、基本的にこれも同じと考えてよい。「早作明竟」、「上如(東)王父西王母」という特徴的な語句を持つものは、後漢の紀年鏡の中でも①銘帯環状乳神獣鏡、②画文帯環状乳神獣鏡、⑥中平4年画文帯環状乳神獣鏡だけであり、クリーブランド蔵鏡以外の鏡式はいずれも環状乳神獣鏡である。これら3面の中でもクリーブランド蔵鏡の銘文は、強いていえば、②画文帯環状乳神獣鏡に最も近いといえよう。

3) 外区

先にあげた後漢の永康元年鏡4面だが、これらはいずれも外区が菱雲文帯である。その菱雲文の特徴を確認しておくと、②の画文帯環状乳神獣鏡は、菱形に渦が4つ切り込む菱雲文4渦で、他の①、③、④の3面は菱形に渦が3つ切り込む菱雲文3渦である。製作に際しては渦の部分を彫り残すことから、3渦と4渦の違いは、単に文様の違いではなく重要な違いであることは以前記したとおりである。^(注20)クリーブランド蔵鏡は菱雲文4渦で、後漢の永康元年鏡の中では②の画文帯環状乳神獣鏡と同じである。

通常、菱雲文の周囲には列点文を伴うことが多い。紀年鏡でこの列点文が左右どちらにあるかについても検討したことがあるが、後漢中後期の紀年鏡の中では、永康元年と中平4年の画文帯環状乳神獣鏡しか右にあるものはなかった。この2面以外は内区側からみて

全て菱雲文の左側に施される。^(注21)

クリーブランド蔵鏡の画文帯では、主人公の乗る雲車が左回りに走行する。雲車は②画文帯環状乳神獸鏡、⑥中平4年鏡とも左回りに走行しており、3面とも回転方向は同じである。この3面の鏡については、菱雲文に伴う列点文の位置と画文帯にある雲車の走行方向がいずれも同じである。他の後漢の紀年鏡と比較すると、永康元年及び中平4年画文帯環状乳神獸鏡は、菱雲文帯に伴う列点文と画文帯の雲車の回転方向がこの年号の鏡だけ逆方向となっている。これが範型をみながら製作した結果

なのかなど^(注22)の原因については、さらに検討が必要である。いずれにしろこれら3面の製作には密接な関係がありそうである。

雲車の形態を調べると、②画文帯環状乳神獸鏡、⑥中平4年鏡とも福永氏のいう階段A型である。クリーブランド蔵鏡の雲車は、第3図のとおり②や⑥と同じような形状だが、その表現は②画文帯環状乳神獸鏡の方に似ているようにみえる。

ここで、後漢鏡との比較結果をまとめておこう。

まず、主文に関連して、乳の周囲に蟠踞する獸像を持つものを探したところ、雲車を詳細に描くことで取り上げられることの多い画像鏡(上海58)と獸像の姿態、配置などがよく似ていることがわかった。画像鏡は漢鏡6期(西暦100年～150年)には出現し7期(西暦150年～210年頃)まで製作が続く鏡式である。上海58の主文は精緻で古式の雲車を描くことや、外区文様なども考慮すると漢鏡7期でも6期に近い年代が考えられる。これはクリーブランド蔵鏡の製作年代を考える上でも重要である。^(注23)

銘文では、他の永康元年鏡と共通する特徴的な語句がいくつも確認できた。中でも、②画文帯環状乳神獸鏡と最も関連が深く、①銘帯環状乳神獸鏡や⑥中平4年画文帯環状乳神



(1) 永康元年画文帯四獸鏡



(2) 永康元年画文帯環状乳神獸鏡



(3) 中平4年画文帯環状乳神獸鏡

第3図 雲車の形態

獣鏡ともつながりがあった。

外区では、菱雲文に伴う列点文の位置と画文帯の雲車の方向に注目した。クリーブランド蔵鏡は、②画文帯環状乳神獣鏡と⑥中平4年鏡の2面と列点文の位置や雲車の走行方向が同じで、画文帯の雲車先端の形もこの2面と同じような形状を呈していた。

以上のとおり、クリーブランド蔵鏡は後漢鏡と類似点が多いことがわかった。

3. 西晋鏡との比較

先のとおり、クリーブランド蔵鏡と後漢鏡との関連が判明したが、一方で報告のように西晋鏡かどうか確認しておく必要がある。

西晋は泰始元年(265)から建興4年(316)までのおよそ50年間である。この間の紀年鏡として、第1表のとおり泰始6年(270)年画文帯神獣鏡から建興3年(315)対置式神獣鏡まで22面確認した。^(注24)

まずこれらの鏡式だが、対置式神獣鏡が12面と約半数をしめ、その他は環状乳神獣鏡2面、同向式神獣鏡2面などという内訳になる。永康元年(300)は西晋では後半期にあたるが、クリーブランド蔵鏡が西晋鏡だとすると、四獣鏡は西晋の紀年鏡でははじめての鏡式となり、建興3年(315)対置式神獣鏡について遅いものとなる。鏡式に関しては、この時期の紀年鏡の中に神獣鏡はあるものの四獣鏡はない。

これまでのところ、西晋の紀年鏡は建興3年鏡を除けば、泰始6年(270)から元康8年(298)の西晋代前半、およそ30年間に資料が集中している。西晋が呉を滅ぼして統一するのは太康元年(280)だが、西晋代後半に紀年鏡が少ないことには理由があると思われる。その理由として、武帝の死後元康元年(291)から光熙元年(306)までの間、西晋王朝は八王の乱により政治的混乱が続いていたことをあげることができる。乱は懷帝の即位により収束するものの、西晋王朝の衰退は止めようがなく、建興元年(313)、洛陽は陥落し懷帝は山西平陽に捕らえられ、建興4年(316)には劉曜により長安が陥落したため事実上西晋は滅亡する。八王の乱勃発以降、紀年鏡が少ないのはこうした政治状況と無関係ではないだろう。八王の乱最中に製作された紀年鏡は3面あるが、いずれも八王の乱が勃発した初期の年号で、そのうちの1面である元康3年鏡には偽鏡の可能性も指摘されている。^(注25) この間、それまでとは違って紀年鏡の数量も格段に少なくなるので、クリーブランド蔵鏡が西晋の紀年鏡ならば数少ない中の1面となる。

次に大きさだが、西晋の紀年鏡は直径約9～14cm程度のものが多く、最も大きなグループで16～17cm代である。大きなものとしては、泰始6年環状乳神獣鏡が17.9cmを測り、泰始9年画文帯同向式神獣鏡には同型鏡が3面あっていずれも18cm近いが、これらが最も大

きな紀年鏡である。太康3年(282)対置式神獸鏡も3面あるが、そのうちの2面は16cm以上と比較的大きな部類に入る。したがって、20cm近い永康元年画文帯四獸鏡が西晋鏡だとすれば、他の西晋の紀年鏡よりも一回り大きいことになる。

一方、紀年鏡だけでは西晋鏡の実態を理解するには不十分である。すでに近藤喬一氏が、西晋の紀年墓から出土している鏡を集成しているが、それによれば出土鏡はいずれも小型であり、直径が20cm近いものは見当たらない。^(注26)これについて、西晋鏡は全般的に後漢鏡よりも小形化していることとも関係あるうが、いずれにしろ、クリーブランド蔵鏡を西晋鏡の中で考えると、鏡式及び大きさの点だけでも特異なものとなる。

次に銘文だが、西晋の紀年鏡の銘文は第1表にあげたとおりである。鏡式としては西晋が呉を滅ぼした太康元年(280)以降、ほとんど対置式神獸鏡となる。それらの銘文は「年号+造作明竟+百鍊清銅+服者～」と呉鏡の銘文を踏襲した形式で、それまでの泰始年間の銘文とは一変する。^(注27)クリーブランド蔵鏡の銘文とこれらの銘文とでは類似したところがないため、銘文からは西晋の紀年鏡との関連は認められない。

外区に関しては、クリーブランド蔵鏡のように画文帯と菱雲文帯を持つものは少ない。そうした中で、例えば画文帯を持つ泰始6年画文帯環状乳神獸鏡ならば、外区は画文帯と獸文帯という構成である。その画文帯は、写真だけの判断ではあるが、動物の形も後漢の精緻な表現とはかなり異なっており、雲車の形態は福永氏の分類する階段式にも天秤式にも当てはまらないように見える。画文帯と獸文帯は少し間隔があり、その間に列点がめぐる。泰始9年鏡は画文帯の幅が狭く鏤に覆われており、文様の詳細な比較は難しい。列点文は内区側から見て右にあり、画文帯と菱雲文帯の間には細かな列点文がめぐる。これは泰始6年鏡と同様である。これら画文帯の文様のくずれは後漢鏡と比べると明瞭で、クリーブランド蔵鏡の画文帯は表現が稚拙に見えるものの、西晋鏡のようなくずれは認められないことから、外区に関しても共通点は認められない。

一方紀年鏡ではないが、福井県松岡町泰遠寺山古墳及び愛媛県松山市天山1号墳出土の銘帯環状乳神獸鏡は西晋鏡である。いずれも20cm以上を測る大きな鏡で、近藤喬一氏は「太康年間初鑄は确实と思える」資料とする。^(注28)大きさはクリーブランド蔵鏡と近いが、鏡の鈕座、内区の主文、半円方形帯の有無、銘帯の位置など、いずれの特徴も全て異なっていて、やはりクリーブランド蔵鏡との関連性は認められない。

以上のような検討の結果、クリーブランド蔵鏡を西晋鏡とする要素は見当らなかった。後漢鏡との比較の際に確認した上海博物館所蔵画像鏡のような関連鏡も認められないことから報告どおりに西晋鏡とするのは、疑問だといわざるを得ないであろう。

第1表 西晋の紀年鏡一覧

年 号	西暦	鏡 式	直径 (cm)	銘 文	文 献 (図版)
泰始6年	270	画文帯環状乳神獣鏡	17.9	泰始六年五月七日鏡公王君青同大(半円)	五島15
泰始7年	271	葉文縁神獣鏡	14.9	晋泰始七年正月十五日王氏作青同之竟明且孫百副萬強其口良子孫富昌兮(銘帯)君口王公(銘帯)	五島72
泰始8年	272	神像鏡	9.9	泰始八年五月一日王君位至三公口口(銘帯)	洛陽68
泰始9年	273	画文帯同向式神獣鏡	17.7	泰始九年三月七日張氏作青同園甚大工青且明泰九年作名如日月光上有東王図泰元西王母口食命天生如金石土至三公口世公侯王(方格)	五島22 考古85-4 樋口1993
泰始10年	274	変形神獣鏡	9.9	泰始十年正月四日壬園吾園作吳荆園園且園者得吉壽長生(銘帯)	図説59-1
泰始10年	274	画文帯環状乳神獣鏡	10.0	泰始十年二月(半円)	五島16
太康元年	280	対置式神獣鏡	9.4	太康元年五月九日造作明竟百凍青銅(銘帯)	五島62
太康元年	280	同向式神獣鏡	12.1	太康元年八月七日丁卯口作口竟麗之者壽百世子孫口保天下太平口口萬年口(銘帯)	図説60-2
太康元年	280	対置式神獣鏡	15.2	太康元年口口平末作明竟購人口口服得男女宜子孫口口口口口口(銘帯)	図説60-1
太康元年	280	線条文鏡	12	太康元年十二月十日王氏作宜候王口口口口口萬年(銘帯)	鄂州258
太康2年	281	対置式神獣鏡	14.5	太康二年三月九日吳郡口清園造陌之鏡東王公西王母口園人豪貴士患高遷三公丞相九卿(銘帯)	五島63
太康2年	281	対置式神獣鏡	11.8	太吉太康二季三月三日日中三工立巧幽凍三商三公九卿十二大夫口子十二太口光口口吉王之也(銘帯)	図説59-2
太康2年	281	銘帯鏡		晋太康二年中秋記	図説第2図
太康3年	282	対置式神獣鏡	17.3	太康三年歲壬寅二月廿日吾作竟幽凍三商四夷服多賀国家人民息胡虜殄威天下復雨口時節五穀孰太平長樂(銘帯)吾作明竟三商(方格)	五島64
太康3年	282	対置式神獣鏡	19.8	太康三年六月卅日吾作明竟幽凍三商四夷自服多賀国家人民安息胡虜殄滅時雨應節五穀豐孰天下復(銘帯)	五島65
太康3年	282	対置式神獣鏡	13.6	太康三年十二月八日口賀史為楊州平士三公九卿十二大夫宜吏人訾財千萬子孫富(銘帯)	図説61-2
太康4年	283	対置式神獣鏡	13.6	太康四年正月廿八日造作青竟幽凍三商青龍白虎東王之公西王之母富貴世世吉利太平(銘帯)	図説62-2
太康5年	284	対置式神獣鏡	12	太康五年三口口日吾作明竟三商幽凍三商口口五光十二大夫仕官高遷位口三公子孫吉(銘帯)	樋口1993
元康元年	291	対置式神獣鏡	不明	元康元年造作明鏡百凍正銅用者老壽作者長生家有五馬(銘帯)吾作明口口口口(方格)	図説63-1
元康3年	294	細線式獣帯鏡	17.9	元康三年五月造大毋傷左龍右虎辟不祥朱鳥玄武順陰陽長保二親樂富昌壽敵金石如(銘帯)	浙江104
元康8年	298	対置式神獣鏡	9.7	元康八年(不明)(銘帯)	図説63-2
建興3年	315	対置式神獣鏡	12.3	建興三年五月廿五日大口口作明竟(不明)(銘帯)	考古84-6

泰始9年鏡の銘文は、財団法人五島美術館学芸部編1992による。

文献の後の番号は、考古と樋口を除き図版番号である。

財団法人五島美術館学芸部編1992に図版があるものは、その図版番号をあげた。

4. 後燕及び西秦鏡の可能性について

最後に後燕と西秦の永康元年に当たる可能性についても考えておこう。

後燕と西秦は、ともに五胡十六国の1つである。後燕(386～409)の永康元年は396年、西秦(385～431)の永康元年は412年で、両方の年号はわずか16年しか違わない。後燕は鮮卑慕容部が、西秦は鮮卑乞伏氏が立てた国である。現在のところ、後燕の紀年鏡は確認されていないが、西秦では太初4年(391)神獸鏡が報告されている。この鏡は直径13.3cmを測り、銘文は「□初四年五月壬申朔十四日(以下略)」であるが、鏡銘の干支は実際とは合致しないことや内区の類似から樋口隆康氏は魏の黄初4年(223)^(注29)とする。この他には五胡十六国時代のものとして、西涼の嘉興元年(417)対置式神獸鏡がある。これは、直径15cmを測り、銘文は「嘉興元年歲在大陽、乾_三合作、王道始平、五月丙午時加日中、制作竟、百煉清銅、服者萬年、位至侯王、辟不_羊」^(注30)である。従来呉の建興2年(253)とされてきたものだが、新たに発見された同範鏡により年号が確定された。永康のように何度もある年号とは違って、嘉興は五胡十六国の西涼にしかない。西涼のような西域の弱小国で、どうしてこのような紀年鏡が製作されたのかは不明だが、この鏡はこれまで呉鏡と考えられてきたように、年号を除けば、図像、銘文など呉鏡としても何ら齟齬はなく、その上鉛同位体比の数値も呉の紀年鏡に近いという^(注31)。いずれにしろ、五胡十六国期の紀年鏡はここにあげた2面しかなく、クリーブランド藏鏡と特に関連する要素もない。したがってこのような状況で、後漢鏡との類似を無視してクリーブランド藏鏡をこの時代のものとするのはやはり難しいであろう。

おわりに

アメリカオハイオ州のクリーブランド美術館が所蔵する永康元年画文帯四獸鏡について、この年号が後漢、西晋、後燕、西秦のいずれの時代に相当するか考察してきた。

報告では、この鏡を西晋の紀年鏡とするが、検討の結果、内区主文、銘文、外区といった特徴はいずれも後漢鏡と類似しており、西晋鏡などとは相違点ばかりが目立つ結果となった。したがって、報告のように西晋鏡と考えるのではなく、後漢の永康元年の可能性が高いというのが本稿の結論である。

それでもなお、この結果については疑問も残る。従来同向式神獸鏡の製作年代については後漢末以降とされているので、乳の周囲に盤踞する獸像を持つこの鏡が後漢の永康元年(167)とすると従来の知見からすればその年代はいささか古すぎることである。そうすると、復古鏡の可能性も考慮する必要があるのだが、その場合、銘文は永康元年画文帯神獸鏡などを模倣し、内区主文は画像鏡(上海58)をもとにしたということになる。い

れにしても、今回の考察は実物に基づくものではなく、あくまで図録写真だけの観察であることから、こうした疑問については次の課題とする。永康元年画文帯四獣鏡と画像鏡の類似は、両鏡の製作年代や製作地とも関連する重要な問題である^(注32)ので、これについても稿をあらためて再論することとしたい。

謝辞

執筆に当たっては、浅原達郎、岡村秀典、廣川守氏に御助言いただきました。記して感謝申し上げます。

(はらだ・みつひさ＝京都府教育庁指導部文化財保護課主任)

注1 Ju-hsi Chou 2000

注2 元の「至元」は、世祖代(1264～1294)と順帝代(1335～1340)の2回ある。至元4年はいずれにも存在するが、報告者は後者の至元と考えている。

注3 車崎正彦編 2002、95頁。

注4 車崎正彦編 2002、96頁。

注5 梁 上椿 1940～42(田中琢・岡村秀典訳1989)、P.L.54、図362

注6 上野祥史 2000、56～57頁。

注7 陳 佩芬編 1987

注8 小山田宏一 1993

注9 福永伸哉 2001、109～111頁。

注10 陳 佩芬編 1987、35～36頁。

注11 和泉市久保惣記念美術館編 1985、図版58。

注12 馬 承源 1962、52頁図版。

注13 財団法人五島美術館学芸部編 1992、図版6。

注14 丁 堂華主編 2002、図35。

注15 陳 佩芬編 1987、図版55。

注16 駒井和愛 1953、37頁。

注17 笠野 毅 1983、261頁。

注18 財団法人五島美術館学芸部編 1992、53頁。

注19 張 利亜 1991

注20 原田三壽 1997、136頁。

注21 原田三壽 1997、136～137頁。

注22 岡村秀典 2005、67頁

注23 上野祥史 2001

注24 林 裕己 1995の集成後に刊行された図録等をもとに作成した。

注25 梅原末治 1943、図版六九の一。

注26 詳しくは、近藤喬一 1993参照。

- 注27 林 裕己 1995、18頁。
注28 近藤喬一 1993、166頁。
注29 樋口隆康 1979、233頁。
注30 西田守夫 1990
注31 西田守夫 1990、29～30頁。
注32 筆者は、後漢中後期の紀年鏡及び鈕に文様を持つ鏡は、四川の「広漢」で製作されたと考えている(原田1995、2005)。

参考文献

- 和泉市久保惣記念美術館編 1985『和泉市久保惣記念美術館蔵鏡図録』(和泉市久保惣記念美術館)
上野祥史 2000「神獸鏡の作鏡系譜とその盛衰」(『史林』第83巻第4号 史学研究会)
2001「画像鏡の系列と製作年代」(『考古学雑誌』第86巻第2号 日本考古学会)
梅原末治 1943『漢三国六朝紀年鏡図説』(桑名文星堂)
王 士倫編 1987『浙江出土銅鏡』(文物出版社)
岡村秀典 2005「画文帯神獸鏡」(『綾部山39号墓発掘調査報告書』御津町埋蔵文化財報告書5 揖保郡御津町教育委員会)
笠野 毅 1983「清明なる鏡と天—中国古鏡が規範を内包する根拠—」(『古墳文化の新視覚』古墳文化研究会)
車崎正彦編 2002『弥生・古墳時代 鏡』(考古資料大観 第5巻 小学館)
駒井和愛 1953『中国古鏡の研究』(岩波書店)
小山田宏一 1993「画紋帯同向式神獸鏡とその日本への流入時期—鏡からみた「3世紀の歴史的枠組み」の予察—」(『弥生文化博物館研究報告』大阪府立弥生文化博物館)
近藤喬一 1993「西晋の鏡」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集 国立歴史民俗博物館)
財団法人五島美術館学芸部編 1992『前漢から元時代の紀年鏡』(財団法人五島美術館)
Ju-hsi Chou 2000 *Circles of Reflection. The Carter Collection of Chinese Bronze Mirrors*
(The Cleveland Museum of Art)
張 利亜 1991「一件東漢紀年銅鏡」(『中国文物報』1991年5月19日(総233期))
陳 佩芬編 1987『上海博物館蔵青銅鏡』(上海書画出版社)
丁 堂華主編 2002『鄂州銅鏡』(中国文学出版社)
西田守夫 1990「漢三国六朝紀年鏡雜記」(『考古学雑誌』第75巻第3号 日本考古学会)
馬 承源 1962「越王劍、永康元年群神禽獸鏡」(『文物』1962年12期)
林 裕己 1995「漢式鏡紀年銘鏡集成'94」(『月刊考古学ジャーナル』388)
原田三壽 1995「後漢の紀年鏡について」(『月刊考古学ジャーナル』388)
原田三壽 1997「永康元年鏡の特徴とその製作背景」(『立命館大学考古学論集Ⅰ』立命館大学考古学論集刊行会)
原田三壽 2005「鈕文様を持つ鏡について」(『立命館大学考古学論集Ⅳ』立命館大学考古学論集刊行会)

樋口隆康 1979『古鏡』（新潮社）

樋口隆康 1993「漢六朝紀年鏡新集録」（『樞原考古学研究所論集』第11 吉川弘文館）

福永伸哉 2001「画文帯神獸鏡と邪馬台国政權」（『東アジアの古代文化』108）

洛陽博物館編 1988『洛陽出土銅鏡』（文物出版社）

梁 上椿 1940～42『巖窟藏鏡』（田中 琢・岡村秀典訳 同朋舎 1989）

図版出典

第1図 Ju-hsi Chou 2000, Plate 4

Mirror with Four Nipples and Eight Animals. China, Western Jin dynasty.
300.Bronze,D:19.6cm.© The Cleaveland Museum of Art, Gift of Drs.Thomas and Martha
Carter in Honor of Sherman E.Lee 1995.334

第2図 陳 佩芬編 1987, 拓本58

第3図 (1)Ju-hsi Chou 2000, Plate 4、(2)陳 佩芬編 1987, 拓本54、(3)陳 佩芬編 1987, 拓本55†

表などで使用した書物の略号は次のとおりである。

五島 財団法人五島美術館学芸部編 1992

洛陽 洛陽博物館編 1988

図説 梅原末治 1943

鄂州 丁堂華主編 2002

樋口 樋口隆康 1993

浙江 王士倫編 1987

